

# 大連神社調査記

大野絢也

本稿は、2013年12月5日～7日に本会（以下、記憶研）の有志によって実施された、山口県下関市にある大連神社と併設の大連神社記念資料館の所蔵史資料調査・整理及び口述調査の成果報告である<sup>(1)</sup>。まず調査の経緯について説明した上で大連神社の沿革を概観し、同神社が併設する資料館に所蔵されている諸史資料の価値に関する考察を行う。本号掲載の「大連の記」（赤間神宮水野直房名誉宮司の回想録）及び「大連神社記念資料館所蔵文献目録」も併せて参照されたい。

## 1 調査の経緯

大連神社での調査に至った経緯を述べよう。2013年8月初旬に大連会事務局（現在は閉鎖）を訪問した際、事務局長の岡町和美子氏から大連の学校や企業・団体の関連史資料を収集している場として、赤間神宮境内の大連神社<sup>(2)</sup>とその宮司である水野直房氏を紹介いただいたことが端緒である。そして同年10月下旬、記憶研メンバー3名で大連神社を訪問・見学し、今回紹介する一連の史資料群を発見するに至った。さらに史資料の調査・整理作業を行いたい旨を打診したところ、水野直房氏よりご快諾いただき、今回の調査が実現した。

## 2 大連神社の沿革

大連神社は、1907年10月に旧関東州大連市に建立された<sup>(3)</sup>。その後、神社を大連の氏神（総鎮守）とする目的のために、祭神が天照大神、大国主大神、靖国神とされた<sup>(4)</sup>。そして、1917年に初代宮司松山理三氏の義弟である水野久直氏（水野直房氏の父）が大連神社2代目の社司となった。さらに、1933年には満鉄や市民等からの寄付により社殿建替・拡張を行った。戦時中も水野久直氏の下で継続管理され、在大連日本人の冠婚葬祭などの儀礼に深く関わり続けた。大連神社は大連の発展とともに在大連日本人のなかで、その役割を大きくしていったのである<sup>(5)</sup>。

日本敗戦後、大連神社の立場も大きく変容した。大連へのソ連軍進駐直後、市内ではソ連軍兵士の暴力事件が多発し、彼らが大連神社へ侵入する事態も発生したが、大連神社とその関係者が直接破壊・暴行などの行為を受けることはなかった。駐大連ソ連軍司令部の将校を大連神社へ招待し雅楽・舞楽を披露するなどの交流もあったという<sup>(6)</sup>。そして1947年3月、水野久直氏は家族とともに大連神社の神体を携えながら最後の在大連日本人の一団に加わって日本へ引揚げ

た<sup>(7)</sup>。

引揚げ後、水野久直氏は戦災で被害を受けた山口県下関市の赤間神宮復興にあたり、戦後の資金・資材不足の中、1949年4月に赤間神宮は社殿などの再建を行った。その後、1953年10月には赤間神宮境内に大連神社の小祠を設け、遷座祭を行って大連から正式に下関へ移転した<sup>(8)</sup>。

時を経て近年には大連にあった学校の同窓会が次々と解散したことに伴い、その関連史資料を大連神社へ寄贈したいという要望が高まったため、創立100周年式年大祭(2007年10月)の記念事業として大連神社記念資料館を開設したのである<sup>(9)</sup>。



大連神社記念資料館入口  
 撮影日：2013年12月5日  
 撮影者：大野絢也

### 3 所蔵史資料の価値

「大連神社記念資料館所蔵文献目録」からわかるように、同資料館に所蔵されている史資料は、①大連神社関係史資料、②各種同窓会関係資料(最も多い)、③書籍・回想録、④その他(会社や同窓会以外の帰国邦人団体)関連資料の4つに大きく分類することができる。このことから大連神社記念資料館所蔵史資料の特徴は、大連神社自身に関する史資料にとどまらず、大連に関する学校・企業などの同窓会関連史資料が蓄積された点にある。その内訳は、各会の会報会誌・会員名簿、大連出身者が出版した回想録など多岐にわたる。特に私家版回想録は入手が非常に困難なため、戦後大連に関する文献が1箇所を集積されていることが当資料館の大きな意義として挙げられる。

このように史資料が集積された背景として、戦前から戦後を通じて大連神社が大連出身日本人の人的ネットワークの結節点の1つであったことが大きい。そして、その中心として大きな役割を果たしたのが水野久直・直房両氏であった。大連神社宮司とその氏子である在大連日本人のネットワークは、引揚げ後も維持された。またこのような史資料群は、戦後結成された各会の沿革や活動内容をみる上でも貴重である。これら各会の活動は戦後間もない時期から開始され、日中国交正常化など様々な影響を受けながら、現在の日中間にも人的交流により一定の影響を与え続けており、戦後の日中関係

史を検討する上でも意義がある。



展示ケース内にある書籍

撮影日：2013年10月25日

撮影者：大野絢也

その他特筆すべき点として、当資料館に各同窓会の会旗・写真なども多数所蔵されていることが挙げられる。これは近年いくつかの会が解散する際に、会旗を処分できないという理由により、大連神社へ「奉納」する形をとって当資料館に保管された経緯を持つ。このような「奉納」という手段によって多種多様な形態の史資料が蓄積されてきた点も、当資料館所蔵史資料の特徴である。これら「モノ資料」の整理・活用にあたっては、大連関係者へのインタビューと突き合わせ、史資料のさらなる精査が必要となるであろう。

#### 4 結びに代えて

最後に、調査にあたって様々な面にわたり厚いご支援をいただいた大連神社の関係者のみなさんにこの場を借りて感謝

する。とりわけ懇切丁寧な応対を賜った水野直房氏には衷心の謝意を示したい。

(1) 本稿は、大野絢也・菅野智博・湯川真樹江・佐藤仁史・林志宏「下関大連神社所蔵文献資料概述」(『国史研究通説』第6期、2014年)をもとに修正・加筆したものである。当資料館は「大連神社記念資料室」とも称され、ここでは「大連神社記念資料館」に統一する。

(2) 山口県下関市阿弥陀寺町4-1(赤間神宮)。  
<http://www.tiki.ne.jp/~akama-jingu/>

(3) 水野直房『赤間神宮名誉宮司水野久直大人十年祭誌』私家版、2004年、33頁。

(4) 祭神に靖国神が加えられたのは、日露戦争後間もない時期であったこともあり、満洲での戦死者をも祀るという意味があったという。「第2回水野直房氏インタビュー記録」2013年12月7日、未定稿。

(5) 水野淳正「大連神社の昔と今」『財団法人満鉄会関西地区懇親会講演内容』私家版、2006年。

(6) 「第2回水野直房氏インタビュー記録」。

(7) 水野氏一家は病院船・高砂丸に乗船し引揚げた。1947年3月29日出港の引揚船と推測される。富永孝子『大連・空白の六百日一戦後、そこで何が起こったか』新評論、1986年、507頁。

(8) 水野昭長『大連神社の創建と内地奉変遷について』私家版、2008年。

(9) 水野前掲「大連神社の昔と今」。